

# 共同研究の経過と概要

高橋一樹

## 研究目的

基盤研究「中近世における武士と武家の資料論的研究」（以下、本研究とする）は、日本における通史的武士論構築のための段階的・問題提起的研究として、中世・近世の武家文書以下の各種資料（群）にもとづいた新しい時代像・歴史像を検討するものである。そして、その成果の一端を企画展示として構成、公開し、研究者のみならず社会一般からの意見・批判を含めて、研究の到達点の可視化と新たな研究課題の発見を得ることを目的とする。

歴史資料としての武家文書は、これまで、①内容分析による歴史叙述、②様式分類を中心とした古文書学的研究、それぞれの素材として取り扱われてきた。ここでは、中世と近世という既存の時代区分に依拠して研究が分断的に進められてきた。また、近世以来の考証史学的手法と近代歴史学に共通する古文書の偏重姿勢によって、それと一緒に伝来した多様な史資料との関連性が等閑視されてきた。

しかし、一二世紀末葉から一九世紀後半におよぶ武人政権の断続的な出現や「武士」「侍」の存在といった歴史的事実、あるいは近代以降の武士イメージの再生産や新たな創出といった政治的イデオロギーとの関

係に照らしても、従来型の縦割りの研究方法がもつ弊害を認めざるを得ない。

比較史的研究が警鐘を鳴らしているように、長期間にわたる武人政権の存続と武士の行政官僚化は特殊日本の現象である。武士が文書行政の担い手として展開するプロセスをはじめ、武士やその家にもとめられる政治的・社会的要素の変化が文書以下のモノ資料にいかに関映し、どのような影響を与えたのか、つまり武士を武士たらしめているものとはなにか、ということも決して自明ではない。

文書などの武士関係資料は、家を媒介として一定の時間軸のもとに連続性をもって伝来・存在している。このことを注視しながらも、それを固定的にとらえるのではなく、たとえば文書の内容や性格の移り変わり（中世の権利証書から近世の儀礼資料へ）、文書そのものの移動や偽作、頻繁な書写や情報の改竄・隠蔽、資料群としての再編成の繰り返しなど、モノとしての動態的な要素を観察することによって、それを行う人間＝武士の意識や武士（武家）の連続と断絶を明らかにし、それらを取り巻く国家・社会のあり方を読み解き、既存の時間区分とは異なる新たな枠組みを設定することが可能と考える。

本研究は、武家文書の通時代的研究の必要性を訴える近年の研究動向

もふまえながら、既存の時代区分の枠を取り除いて、上記のような観点から文書以下の武家資料群を原本調査に即して分析する。

さしあたっては、モノとしての文書のライフサイクルはもとより、文書のフォーマットや外的な形態に着目し、公家文書や寺社文書あるいは地域の民衆世界に残された文書史料とあわせみることによって、武家文書の作成・保存・機能がもつ社会的影響を考察する。また、モノとしての機能や伝来理由という点については、武士あるいは武家の表象としての文書（たとえば威信財）という視点を導入し、文書以外の史資料（武器・武具・絵画・和歌資料・茶道具・華道資料など）との関係構造を検討する。その際、これまで研究の蓄積の薄い中近世の漆紙文書などの考古資料も検討材料として重視する。

研究の体制としては、本館が所蔵する中世・近世の武家文書等を中核としつつも、人間文化研究機構内の研究機関はもとより、国内の歴史博物館との協業により、可能なかぎりの資料の集成と検討の体制を作りたい。あわせて、本館を含む全国の歴史系博物館・資料館が抱える文書展示の困難性を打開するために、情報工学等との連携を含めて、新たな文書展示の方法を開拓することも模索したい。

## 研究期間

二〇〇八年～二〇一〇年度

## 研究組織

大友一雄 国文学研究資料館研究部  
久留島典子 東京大学史料編纂所  
近藤好和 国立歴史民俗博物館研究部客員  
佐伯真一 青山学院大学文学部  
佐藤宏之 鹿児島大学教育学部

高久智広 神戸市立博物館

高橋裕次 東京国立博物館

富田正弘 学識経験者

マルクス・リュッターマン 国際日本文化研究センター研究部

前嶋 敏 新潟県立歴史博物館

青山宏夫 国立歴史民俗博物館研究部

安達文夫 国立歴史民俗博物館研究部

岩淵令治 国立歴史民俗博物館研究部

井原今朝男 国立歴史民俗博物館研究部

大久保純一 国立歴史民俗博物館研究部

久留島浩 国立歴史民俗博物館研究部

◎小島道裕 国立歴史民俗博物館研究部

◎高橋一樹 国立歴史民俗博物館研究部

工藤航平 国立歴史民俗博物館リサーチアシスタント

西山 剛 国立歴史民俗博物館リサーチアシスタント

三野行徳 国立歴史民俗博物館リサーチアシスタント

菱沼一憲 國學院大学文学部 国立歴史民俗博物館共同研究協力者

ゲストスピーカー

恵美千鶴子 東京国立博物館

佐藤宏之 一橋大学社会学部（二〇〇九年度より共同研究員）

高橋 修 茨城大学人文学部

長谷川伸 新潟市歴史博物館

澤田和人 国立歴史民俗博物館研究部

湯浅治久 市立市川歴史博物館

平川 新 東北大学東北アジア研究センター

◎は研究代表者 ○は研究副代表者（所属は二〇一〇年度）

## 研究会および展示・資料調査の経過

### 研究会

- ◇第一回研究会 二〇〇八年七月一日 於国立歴史民俗博物館  
高橋一樹「共同研究の開始にあたって」  
高久智広「国立歴史民俗博物館所蔵本多家文書について」  
小島道裕「館蔵『対馬番家（小宮家）文書』『石見亀井家文書』『越前島津家文書』解説」
- ◇第二回研究会 二〇〇八年七月一九日 於国立歴史民俗博物館  
高橋一樹「共同研究の目的と研究計画」
- ◇第三回研究会 二〇〇八年九月一日 於東京国立博物館（人間文化研究機構連携研究「武士関係資料の総合化」と合同）  
高橋裕次「東京国立博物館の歴史展示について」  
恵美千鶴子「東京国立博物館所蔵の生人形について」（ゲストスピーカー）
- ◇第四回研究会 二〇〇八年一〇月三十一日 於国立歴史民俗博物館  
高久智広「『本多家文書』に関する覚書―役職補任との関係から―」  
全体討論「本多家文書」文書群の概要とデジタル化について
- ◇第五回研究会 二〇〇八年一二月七日 於国立歴史民俗博物館  
高橋一樹「中世武家文書の保存と廃棄」
- ◇第六回研究会 二〇〇九年三月七日 於国立歴史民俗博物館  
近藤好和「武士と戦闘」  
安達文夫「文献史料を使った歴史展示とデジタル技術の応用」  
菱沼一憲「中世前期における『武士』の用法」
- ◇第七回研究会 二〇〇九年六月一三日 於国立歴史民俗博物館  
高久智広「本多家文書にみる旗本家文書の資料的特質」  
佐藤宏之「近世大名の改易・再興とモノ」（ゲストスピーカー）
- ◇第八回研究会 二〇〇九年十一月一日 於国立歴史民俗博物館  
高橋一樹「企画展示構成案について」
- ◇第九回研究会 二〇〇九年十二月一・二日 於国立歴史民俗博物館  
高橋 修「『川中島合戦図屏風』と越後流軍学」（ゲスト・スピーカー）  
長谷川伸「戦国武士の転身と軍学」（ゲスト・スピーカー）  
マルクス・リュッターマン「出陣次第について」
- ◇第一〇回研究会 二〇一〇年一月九・一〇日 於国立歴史民俗博物館  
高橋一樹「企画展示構成案について」  
井原今朝男「結城合戦絵詞について」
- ◇第一一回研究会 二〇一〇年二月二〇・二一日 於国立歴史民俗博物館  
澤田和人「女性の小袖意匠にみる公家と武家」（ゲスト・スピーカー）  
大久保純一「錦絵にみる川中島合戦」  
富田正弘「武家文書と料紙」
- ◇第一二回研究会 二〇一〇年五月一五日・一六日 於新潟県立歴史博物館  
湯浅治久「中世武士と寺院に関する議論と史料」（ゲストスピーカー）  
久留島典子「益田家文書を活用した由緒論的展示について」  
菱沼一憲「戦功認定文書の通史的展示について」  
全体討論 企画展示「武士とはなにか」展示資料全点の趣旨説明と検討
- ◇第一三回研究会 二〇一〇年一二月七日 於国立歴史民俗博物館  
展示批評 平川 新（ゲストスピーカー）
- ◇第一四回研究会 二〇一〇年一二月二五日・二六日 於国立歴史民俗博物館

コメント 久留島浩・高橋一樹

全体討論 企画展示「武士とはなにか」および総合展示1室・2室・3室・5室における関連展示・特集展示の自己批評と展示の成果・課題について

◇第一五回研究会 二〇一一年一月三〇日 於国立歴史民俗博物館

高橋一樹「企画展示「武士とはなにか」を通してみた成果と課題」

小島道裕「武士関係資料の分類に関する再検討」

全体討論 共同研究の成果・反省と研究報告特集号への集約について

#### 展示・資料調査

◇展示史料調査①「戦国武将からの手紙」展

二〇〇八年九月二八日 於群馬県立歴史博物館

◇展示史料調査②「戦国大名後北条氏とその文書」展

二〇〇八年一月一日 於神奈川県立歴史博物館

◇展示史料調査③「江戸の武士と釣り文化」展および江戸の復元的展示

二〇〇八年一月一九日 於中川船番所資料館、深川江戸資料館・江戸東京博物館

◇展示史料調査④「郷土の雄・熊谷次郎直実展」展・「日本刀は語る」展

二〇〇八年一月二四日 於熊谷市立熊谷図書館、群馬県立歴史博物館

館

◇展示史料調査⑤「誕生 武蔵武士」展

二〇〇九年三月一日 於埼玉県立歴史と民俗の博物館

◇展示史料調査⑥

二〇一〇年三月一七日 於國學院高等学校日本文化史資料室

◇展示史料調査⑦「雑兵物語の世界」展

二〇一〇年三月二六日 於埼玉県立歴史と民俗の博物館

◇資料調査

二〇〇九年二月一日 鈴木家文書（神奈川県横浜市）の原本調査・撮影

二〇一〇年二月六・七日 彦部家文書（群馬県桐生市）の原本調査・撮影

撮影

二〇一〇年五月一五・一六日 新潟県立歴史博物館（新潟県長岡市）

「越後文書宝翰集」原本および紀州本川中島合戦図屏風複製の熟覧

#### 研究の概要

本研究は展示型共同研究として館内初めてのケースであり、その研究活動の進め方について試行錯誤の要素を多分に含むが、研究期間三年目の秋までは企画展示準備を主たる方法とする共同研究という性格づけとし、展示オープン以後から実際の展示空間・資料を活用した狭義の共同研究をプロジェクト外の研究者も含めて行うこととした。

二〇一〇年秋の企画展示開催までを共同研究のなかでの展示準備研究と位置づけ、より狭義の共同研究を展示開催中からの約半年間と割り切つて設定したのであり、それによって研究活動の計画性が高まり、かつ各年度の目標もより明確になったと考えられる。

とりわけ研究方法上の特色として、本館等での研究会や熟覧的手続きの要する資料調査とは別に、関東圏の博物館・資料館で開催される武士・武家関係資料の企画展示・特別展を随時見学し、展示資料のみならず展示手法についても検討する機会を積極的にもつたことがあげられる。

まず一年目は、武士・武家の関係資料をどのように資料論的に把握するかについて、文書・典籍・武器・武器・絵画・諸道具などのように、学問分野や研究方法に立脚した即物的なステレオタイプの分類ではなく、現代までを視野に入れた通時的な機能の観点から、

① 武士・武家による自己表象

② 武士・武家以外の他者による表象

という類型立てを作業仮説として提起した。

さらに、人間文化研究機構の連携研究「武士関係資料の総合化」との合同の研究會・資料調査および討論を経て、そこに資料が生成される動機の変化や伝来形態のバリエーション、あるいは多次的な機能の変容といった、資料をめぐる歴史的動態を組み込むために時間軸を導入し、

ア、同時代

イ、後世

の軸で把握する方法が提案された。ただし、この「同時代」と「後世」という時間軸は絶対的かつ静態的な区分ではなく、可変性をともなう重層的なものであることに留意することが必要であり、その時期区分の変動を規定する要素の具体的検出がもとめられる。さらに、上記に加えて、通時的な資料の量的推移も組み込むことによって、三次元による武士関係資料の動態を可視的に把握することが可能になる。

武士・武家関係資料の総体を十分に掴むことは容易ではないが、現実にはさまざまなかたちで存在する（存在した）資料の立ち位置を理論的に整理・把握する仮説が得られたことは大きな成果である。そのうえで、関東圏の博物館で開催されている展示の見学を重ねるなかで、中世と近世を通じた武家の家伝資料群のバリエーションについても、研究史のレビューから得られた想定を超える事例が、具体的な素材（資料群）の裏付けをもって獲得でき、その実際の展示（現代における歴史研究に裏付けられた表象）方法のあり方についても展示の現場で議論することができた点も重要である。

つづく二年目は、武士の実像を表現する武器・武具の通史的展示に関する報告と議論を中心とした研究會と、展示構成案の報告と議論を行う企画展示プロジェクト委員会と合同の研究會を開催した。

それと並行して、群馬県桐生市の彦部家資料および同家住宅の個別調査を実施し、本研究とタイアップして開催する企画展示での活用を含め

て検討した。この間の活動を通じて、本研究の研究目的にある、中世と近世を通じた武士と武家に関する資料論的研究と表象論的研究を総括する分析視角として、武士・武家にかかわる多様な資料の機能とその多次的な変容に着目し、それらを各時期の社会的文脈のなかに位置づける作業を意識的に進めた。

三年目は本研究のもっとも重要な研究方法の柱である企画展示の開催準備と実際に展示空間と資料を使った研究を中心に活動を行った。

過去二年間の蓄積をふまえて、企画展示の準備と実際の展示を使った独自の研究方法をとりうる最終年度であり、年度当初に資料論的な観点から展示を構成するためのメルクマールを以下のように設定した。

- ① 中世と近世を一貫させた視座の確保。とくに時代間の連続と断絶の両面に留意する。
- ② 資料（群）の機能とその変化、つまり資料が生成され存在していることの意味を問う。
- ③ 自己表象と他者表象（後世の武士による前代の武士に対する表象をも含む）の分別とそれぞれの具体相の追究を行う。
- ④ 各分野ごとの資料における武士の固有性の有無について検討する。
- ⑤ 武士個人（男）と武家（男と女）の区別とジェンダーの視点を組み込んだ分析。
- ⑥ 武士の存在理由とその表象のあり方を国際関係の文脈のなかで検証する。
- ⑦ 武士階級内部の階層的秩序、とくに「差別」の実態を資料に即して掘り起こす。
- ⑧ 生活史の視点を保持して、可能なかぎり衣・食・住の具体像に配慮する。

以上の八点をふまえて、これまで各分野ごとに縦割りの研究対象とさ



れてきた文献資料・武器武具資料・美術資料・考古資料などを武家関係資料（群）として総合化することを基調としながら、展示趣旨の概要を示すプロローグ「武士を描く・武士が書く」につづき、「戦いのかたち」「武家のひろがり」「武士のイメージと軍学者」「文武両道」の四テーマに、武士身分の消滅した近代以降にも論及するエピソードの「武士の消滅と新しい「武士道」」を配した構成のもと、武士・武家の社会的機能とその変質、生活史、そして武士イメージの創出とその歴史的背景やメディアの特色を中心に学際的な資料を展示することができた。あわせて、総頁二一三ページにおよぶ展示解説図録を編集・刊行した。

武士の多様性や時代的特質を示すことから「武士とはなにか」という基本的な問題設定の有効性を問いかけた企画展示では、資料の総合化とその機能の変遷を軸とするコーナー設定と資料配置がおおむね好評を得ることができ、中世と近世の協業によって長い時間軸を扱いながら武士イメージの創作をも対象にしたことで、偽文書や系図、由緒書、文学作品、軍学資料、錦絵などの資料的性格と相互関係が展示によって可視化され、それらの史料としての研究を活性化させるうえで一定の問題提起を行うことができた。

また、これらの資料（群）が生成されるコンテキスト自体の慎重な検討と、それに即した資料の配列やその解説（共同研究員Ⅱ展示プロジェクト委員による展示場でのギャラリー・トーク）は、文書を中心とした文字資料の難解な読解とその内容理解を「強要」してきた従来の文書展示に反省を迫り、必ずしも文字読解を必要としない展示方法の開拓に大きなヒントが得られた。衣・食・住の生活史についても、屋敷・館（ハドウェア）の枠組みのもとに資料群を組織し、考古学の成果を取り入れた屋敷じたいの時代変化と組み合わせ展示した。

中世と近世を結んだ資料内在的な共同研究には大きな課題が残されており、近世以降における武士イメージの形成とも密接不可分にかかわっ

て、近世末期の再軍備の時期に武器武具資料や戦功認定文書などさまざまな資料群において中世への回帰、中世武士のイメージが呼び出されて実体化する現象が確認されたが、その歴史的背景を論理化する作業は今後の課題となった。また、戦士を本質とする武士の存在理由ともかわる番役の通史的検討や、武芸の担い手に関する社会的広がりとの追究とその歴史的評価の問題なども残された。とくに最後の論点は、平川新氏による展示批評（『歴博』一六五号、二〇一一年三月）でも強く指摘されたところである。

歴史展示という現代における表象手法の研究に関連して、歴博ではじめて資料原本の代替物として戦国合戦図屏風のデジタル資料をタッチパネルを使って展示したのをはじめ、展示箇所以外の資料内容を見ることができるよう設置したデジタル・ツールはiPadの導入もあって観覧者の好評を博した。当初、目標としていたデジタル・ツールを活用した文書展示の開発は種々の事情により断念せざるをえなかったが、いわゆる複合文書の理解にデジタル画像がきわめて有効に機能することなどが議論され、その実用化を総合展示で検討していくこととした。

企画展示で刊行した展示解説図録には論考編を掲載せず、展示趣旨の解説を補うコラムのみ執筆・掲載した。実際の資料配列をとまなう展示の開催と図録刊行をふまえたうえで、本研究（企画展示を含めて）を通して得られた上記のような新たな視角にもとづいて共同研究員等が各自で論考にまとめ、本研究報告の特集号として刊行する。

（武蔵大学人文学部）